

等或る時は頤を解き、或る時は腹を抱へ、或る時は隨書し、或る時は神々しさに打たれ觀者三百餘名に達し、和氣靈々の裡に萬歳三唱して散會せしは十二時、噫能所俱に法益深大なりし當日の降誕會よ。

富士五山靜岡地方修學旅行記

五月二十五日、此日天善く晴る、四山の高嶺淡靄に封ざられ四河の流れ珊々聲あり、東天未だ白まず、山風蓬々嵐氣骨に徹する頃、吾祖山健兒旅行隊の一行は全員三十五名、關本教頭田附中村の岡先生大野、脇本、杉本、役課諸師引率の下に旅途に付く、四時祖師堂前集合音吐遊亮法味を獻じ、道中安泰を祈り大野に向ふ。五時舟人の一竿に身命を託す、日既に上りたれども、七面山腹の雲輝光を受けて黃紫を呈し彩光將に流れんと欲す、此の山彼の雲元龜年間割居の英雄信玄の眼には如何に影ぞしか舟岩を嘯む事數度幸なる哉泪羅の鬼ともならず、八時芝川着舟を捨て隊を整へ西山本門寺に至る。當寺は大内齋院殿の建立日代上人の開基、三堂具足も悲哉祖師堂のみ現存す、寂寞たる老杉骸にうた、今昔の感に打たれ流涕去るに忍びざりき。其れより十五町にして弘法山三澤寺に至る、時に十一時、山主の御厚意に依り香茶を頂戴し山奥より運搬せし竹皮包を開く、炎熱加わるゝ共に意氣益々盛なり。正午富士山妙蓮寺參拜、開基は日華上人、南條殿の建立、老樹鬱蒼として塔塔嚴備す院籍の青き眼ある可き事別して身延山一行と聞く

からには近傍に南條殿御夫婦の御墓ありと聞けども詣らず、惶惶として歩を進め大石寺に向ふ、一時十分着、總門内兩側に十三箇坊整然列を爲す、宗門専門道場を右手に見つ、祖師堂に參拜、法味獻上す、當山は大日蓮華山大石寺と號す、三堂肅然として堂を並べ宏壯なる伽藍は富岳と對照の妙を得、能く興師當年の壯圖を語る、御厚意に依り賣物拜製を許さる、山主阿部日正師清淨の大衆を統し莊嚴に開扉せらる「又如一賑之龜值浮木孔」情激する時は語逼らざるを得ず、只數反の唱題にて黙禱す、一間靈感に打たる。言無く語無く文字無し、當山を辭せしは四時半、時に小雨降り來る、宗祖常住不滅の御涙か興尊道場影現の御涙か「各自の感興言外に在り、十有餘下にして北山本門寺に至る、當寺は日法人開基永仁六年二月十六日本門二堂建立後堂宇の興亡盛衰屢今は庫裡及假本堂あり、門前に數十椽の老杉門内に一老櫻樹あり、皆興尊の御手植と傳ふ、本堂右裏手に興尊御茶毘所並御廟所身延山遙拜日澄上人御墓等あり、左手數丁にして玉樹山正林寺あり、是れ頂尊隱世の地にして御母公妙常日妙姉乙御前妙國尼と共に御墓所在り。嗚呼千載不幸の人として許されず、父泣き子泣き滅後門下の紅涙を搾りし泣銀杏一又日奠上人腰掛の石發願の梨重須檀林跡あり、頃は正安元年の澄み透た月の夜に寂寥を破つて願々々響く興尊轉法輪の御聲がひたさ止つた、はつこ我に歸つた尊師は毎年鶴林會の際に櫻樹の下の石に慰ふては正御影の尊像を伏拜する身となつた師殿にして道尊の御垂訓げに聖祖門下の生ける龜鑑

なり。宗祖在世の砌の三澤入道内房尼の事と共、洵に宗門三大好範とも言ふ可し。北山より二里午大宮町に向ふ暮色蒼然として四邊を覆ひ老杉古檜森々として神さび見ゆるは淺間社の森、一同之を目的に進む。七時十五分大宮海松樓に投ず十時半睡眠、仙骨運の夢路や如何に平和なりしか。

二十六日晴天五時起床六時出發、官幣大社淺間神社觀覽々々公園あり、滾々として瀆瀆する玉泉洞は湧玉池と稱し、晶明澄徹富嶽の積雪溶けて迸り出づ、七時二十五分大宮驛發嚴容端嚴嵐輝千秋居然神洲の雄鎮を左手に眺めつ、八時入山瀨に着三丁にして曾我寺に至る、建久四年岳麓の花嵐篠つく雨に炬火打ふり父の仇を討ちたる曾我兄弟の墓あり、其より一里半熱原に至る、持榮山本照寺と號し、加島法難の靈跡たり、弘安二年十月秋の空林をかすめて消去りし七反の題目、如説修行の行者熱原神四郎の壯慘と純勇慘絶又壯絶其の信念氣骨學士銘曰く、「慘歎法禍凶人之弓壯歎法子正氣吐虹一箭一唱厥聲玲瓏樹上血叫萬代雄風流芳千歲遺烈光隆如芙水冽比蓮嶽高更に踵を返して、一里有餘岩本實相寺に至る毎年の御迷惑に恐縮の所へ山主御自身の御案内益々恐縮す、當山は宗祖が三災七難の佛誡に基き、一大國家的論策立正安國論御述作の地にして硯水の井、今に清泉を湛ふ、寶物としては法師作の祖像、抹香の祖像、傳太子像眞言時代大黒天、(安政年間色彩)大日如來像朗師米洗の井日法上人御墓等拜觀茶菓頂戴、後岩瀨驛に向ふ、十一時三十分發車、富嶽を後に太平洋を左手に見つゝ走る

零時半靜岡着、隣伍堂々感應寺に至りしは一時、當寺は日本三感應寺の一にして向尊の開基たり、適偶小港誕生寺御出張多忙を窮む御厚情に依り中食頂戴、小憩後淺間神社を拜觀し巖機公園絶頂に攀ち涼風を腹に滿し全市中を眼中に納む、山を降りて大龍山監濟寺に至る、當寺は享祿年間今川氏の建立にして小規模なれども堂宇整然として境内の風致絶待なり、永祿三年桶狭間の露と消ぬし義元の墓あり、貞松蓮永寺に至りしは四時、一同旅装をこきて一泊す、當山は持尊の開創にして始め庵原郡松野村に在りしを元和元年日乾上人養珠夫人と共に駿城良位鎮護道場として今の地に移す、境内廣潤寶地伽藍完然たり。

二十七日晴天四時起床一同法味を捧ぐ、山主の懇篤なる御訓話「修學旅行の歴史的研究と共に地方の宗教情態觀察」安國殿の後方なる養珠夫人の御廟に參拜、一同旅装を整へて當山を辭せしは七時數丁にして池田本覺寺に至る、當山は青龍山と號し中老治部公日位尊者の開基たり、山主杉田僧正より身延山に學生として特殊なる心得等御懇切なる御垂示あり、香茶香物に各自舌鼓を打ち中食として頭大の御結びを頂戴し嬉々として又發す、一里にして久能山に至る時に十時、山麓の茶店に憩ふ、凡そ駿遠の地山河多しと雖も海洋の煙波を受け四望かく空濶なるはなかるべし。流石打算の智謀に富みし東照公の好鑑賞讀に値す可し、二十餘餘の登道千餘段の石階も身延仕込の健脚物の數かわ、途中寶物館物見の松勘助井戸あり社殿は莊嚴にして情景神さびたり、本殿の後

方に一丈五尺の巨石塔立つ之れ墓標なり、萎の祖龍は物質を遺せり我等が祖龍は萬代不滅の精神を遺せり又多感なり、山を下りて中食の後更に龍華寺に向ふ、於爰強脚弱脚の二派を爲り旅程を進む唱題の聲に博士の夢を破り、讀經の聲に野の人の現を覺しき知生の詩人ニイチテを歎美し、諷刺家ハイネを友さし「彼れには樂むべき自然あり」と天賦の榮光に憧れし博士の靈や如何に！途中村松海長寺に詣て五雙小舟にて四時最勝閣に至る、御出迎も有難く甘露殿にて茶菓頂戴し、少憩後鈴木氏の御案内にて残りなく拜觀、三層樓上の待勅殿よりは四方の遠眺絶佳也「神さびし神代なりせば千鳥も我はならまじ三保松原」と野の人が詠ぜしもげにや、羽衣の松も此の海邊の松原中にありと傳ふれども今は其の跡のみかすかに残りりと聞く、其の名も高き田子の浦、富士も薩垂峠の霞に遮られて見えず、只伊豆の山々青螺の如く連りて空を劃り煙波漂渺遙に御前ヶ崎を望む、凡ての景物限り無く壯大なり。袖師の濱浦つたひに又小舟に分乘して清水港を経て七時四十分江尻驛より車中の人となる、八時與津下車羅海寺様の御厚志にて龜嶋樓に投す十時着床。

二十八日五時起床、浮雲有り一同隊を整へ清見寺に至る、碑文有り幕末の傑士榎本武揚曰「食人之食者死人之事」と

況や吾等聖祖門下として豈に醉生夢死すべけんや、古の清見ヶ關は此の寺の麓に在りきと、其の昔維新の少將が水鳥の羽音立つ足もなき十萬騎轡をへてこの關越はこしも、思へばわかし。

眸を放てば駿河灣は蒼茫として伊豆の峯巒煙靄の中にあり、薩垂時に遮られし富嶽はわづかに其の頂を見ず、白帆點綴鳧鴨こ飛ぶ長汀曲浦の眺め得も云はれず、こゝ、江山の美を盡すこゝろ松韻濤聲不斷の樂を奏する處「美じきかな山や水や憎みなく、それみなく偽りなく哀へなし」と博士の憧れしもげにや、こゝはりなり一同盡せぬ名残にこみつ、羅海寺に向ふ、山主御不在にて御院代の御丁重なる御挨拶あり、此處より八木間淨蓮寺に至る、恩師龜口龍謙師の御健勝を祝し少憩後彌山路に入る三里にして十一時小河内蓮華寺着、時に天候稍險惡となり雨點兩三帽帷に零つ、一同中食を喫し萬澤に向ふ一時半穴原に至る一天朦朧として蒙雨津々一行の困難云ふばかりなり四時萬澤に至り福井屋に投す八時着床。

二十九日七時起床、當地は往昔元政和上一泊の地にして吉田某殿我等一行の爲にさて和上御遺體一幅を拜見す、昨日の洪雨何處に去りしか此の日又快晴にして、東を望めば連峯疊嶂の背後に八朶の秀峯碧落を摩して聳ゆ、里計にして福士に至る、休憩二十分十二時南部妙淨寺着、篤信者木内敬三郎氏の御厚志に依りて中食を頂戴す、山主よりも御菓子の御馳走になり二時發足す、大野山に至りしは五時、校歌劉曉として滿山に響き隊伍肅々として山門に着せしは六時一行熱誠なる志を捧げ奉る、噫、旅行隊は無事なりき、宗祖の暖き御懷に懷數御膝元に歸れり本地の風光長へに別なる此の靈域に我等は又意義ある生活を續くるであらう、暮色蒼然たる中に一同散隊す。(川口、太田兩生記)